

令和4年10月14日

R4 全国都市問題会議参加報告

報告者 串田金八

【開催日】 令和4年10月13日（木）、14日（金）

【会場】 出島メッセ長崎

【参加者】 石川義郎、山崎貴裕、小林貢、小澤芳輝、佐藤弘治、幡垣正生、武藤政義、串田金八（議席番号順）

【概要】

個性を活かして「選ばれる」まちづくり～何度も訪れたい場所になるために～

日本は2000年代より人口減少社会となりました。少子高齢化、労働人口の減少、地域経済の衰退など、日本社会は様々な課題に直面しています。その課題は具体的には地域によって異なるが、将来にわたって持続可能な都市になるためには、その地域に一定の密度での人口が維持されなければなりません。各自治体は、人口の量的な維持・拡大を念頭に置きながら、様々な分野において、直面する諸課題に取り組んでいます。

このような中、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが発生し、ロシアによるウクライナ侵攻や、物価の高騰、円安など、日本の社会には大きな変化がありました。こうした状況の中、大都市への流入という従来の流れではなく、それぞれの地域が個性を活かして選ばれるまちになっていくことが求められています。

都市が持続的に発展していくためには、広い視野で人と地域の様々な関わり方を実現していくことが必要であり、地理的条件や地域資源など、様々な都市の個性を活かした魅力あるまちづくりに取り組み、地域外の人々が継続的・定期的に訪れる機会を想像するための方策を検討することが重要であります。今回の会議においては、「また訪れたいくなる、何度も訪れたいくなる」魅力ある地域づくりのための基本的な考え方や処方箋を検討し、議論します。

【基調講演】

民間主導の地域創生の重要性 (株)ジャパネットHD代表取締役社長兼CEO 高田旭人氏

ジャパネットは、36年前に長崎の小さなカメラ店としてスタートしました。父でジャパネットの創業者でもある高田明は、ラジオを使った新しいショッピングの形を生み、テレビ、チラシ、カタログ、インターネットと様々なチャンネルで通信販売事業を行ってまいりました。36年経った今でも、変わらず父から受け継いでいることがあります。それは、「見つける」「磨く」「伝える」という方針です。

通信販売を行う中で、ジャパネットの存在価値は、良いモノを買いたいけれども、世の中に溢れている商品の中から選択するのは大変だという方に、「ジャパネットとしての商

品やサービスをこだわって見つけ出し、その魅力を徹底的に磨き上げ、世の中に伝えていくこと」だと考えています。

「なぜジャパネットが地域創生を？」と思われる方も多いと思いますが、2017年より長崎のプロサッカークラブ「V・ファーレン長崎」の運営を始めたことをきっかけに、地域を持ち上げていきたいという想いが強くなりました。

まだ誰も気づいていない地域の魅力的な資源を見つけ、それを徹底的に磨き上げ、全国各地の方に伝えていくことで、長崎の活性化に貢献できると考えています。

【主報告】

長崎市の魅力あるまちづくり

長崎県長崎市長 田上富久氏

価値観はますます多様化しており、人口の多さや経済力の高さといった数字で比較できる価値もさることながら、暮らしやすさや歴史・文化の深さなどその都市ならではの価値にも注目されるようになってきました。この新たな価値を求めて大都市から地方へと新たな人の流れが生まれ始めています。私たちが住んでいるまちの価値を見直すことで、人を惹きつける魅力と、新しい時代の多様な都市の在り方が見えてくるかもしれません。

2015年世界遺産に認定された、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製銅、造船、石炭産業」の構成資産の1つである端島炭坑(軍艦島)が挙げられます。

2021年10月に開業した長崎市恐竜博物館も価値を見つけた1つです。イギリス名のDINOSAURIAを恐竜と訳したのは長崎出身の考古学者横山又次郎氏であります。こういったことから長崎と恐竜という新たな価値が見えてきました。

長崎さるくも新しい価値の1つです。「さるく」とは、「ぶらぶら歩く」という方言で、市民が観光旅行者等にガイドをするというものです。正和会では、平和公園等の視察で実際に長崎さるくガイドの方に説明をしていただきました。

【一般報告①】

地域との新しい関わり方・関係人口

島根県立大学地域政策学部准教授 田中輝美氏

関係人口とは、短期間の交流や観光という関わり方ではなく、長期間暮らし続ける定住という関わり方でもない、その間にある新しい地域との関わり方のことを言います。この「観光以上、定住未満」という新しい関わり方について説明していただきました。

【一般報告②】

ビジョンを活かしたまちづくり～選ばれる「山形市」を目指して～

山形県山形市長 佐藤孝弘氏

魅力的な地域資源を有する山形市ですが、多種多様な都市機能を担う宿命を負っています。その山形市が選ばれるまちになるためには、市として明確な将来のビジョンを定め、様々な政策をそれに結びつけて展開していくことが重要であります。その2大ビジョンが「健康医療先進都市」「文化創造都市」であります。

【一般報告③】

「交流の産業化」を支える景観まちづくり～長崎市景観専門監の取組み～

(一社) 地域力創造デザインセンター代表理事 高尾忠志氏

現代において地域が迎えている課題は、これまでの縦割りの組織体制による分野ごとの施策実施では到底太刀打ちできません。「小さな目的の達成を積み重ねても「大きな目的」の達成がされない時代に、我々はまちづくりに携わっています。縦割り制度の中で、分野の境界を越え、ビジョンを持って取組む人材が自治体に多く存在している地域が、分野融合型のクリエイティブは成果を出し、より良い地域になっていきます。まちづくりを行うのは人であり、特に自治体職員はそのハブを担う重要な存在であります。こうした観点から、職員育成という「人的資本」、人のつながりという「社会関係資本」に投資する自治体戦略としても「景観専門監」は非常に興味深い仕組みだと感じています。こうした仕組みが今後展開し、各自治体において質の高い景観まちづくりが実現されることを願っています。

【パネルディスカッション】

「選ばれる」まちづくりに向けた都市自治体のアプローチ

コーディネーター：大杉覚 東京都立大学法学部教授

パネリスト

野口智子 ゆとり研究所 ワーケーションの意味の拡張と変異

桐野耕一 NPO法人長崎コンプラドール理事長 人は人に会いに行く！まち歩きで見つけたまちの作り方

都竹淳也 岐阜県飛騨市長 人口減少先進地の挑戦

藤原保幸 兵庫県伊丹市長 清酒発祥の地・伊丹～酒と文化が薫るまち～

【所感】

平成元年11月に鹿児島県霧島市で開催された都市問題会議以来、3年ぶりに参加し、そのスケールの大きさに改めて感動しました。ここ長崎市の出島メッセには約2000人の市長、議員、職員が集まり、選ばれるまちづくりについて一緒に勉強するというところに大きな価値を感じました。

全国的に人口減少が進んでおり、日本中のあらゆるまちでその対策を考えています。各地の報告を聞く中で、様々な発見があり、我がまち福生にどれが活かせるのかを考えながら聞いていました。

一般報告の中で、「ふるさと難民」という言葉が出てきました。まず、「ふるさと」とは何かということ考えた時、そこには人と人との交流があるからその場所がふるさとになるのだと思いました。そういったことを考えると、ふるさとの仲間を増やしていこうと思うなら、人と人がもともと交流するのが良いと思います。しかしながら、現在のコロナ禍は人と人の交流を断絶してしまいました。今後コロナ禍が終わった時には、どんどん交流を推し進めていくのが自治体の使命だと感じました。町会の活動が縮小してしま

っているのであれば、今いる人たちは新しく来た人たちをどんどん引き込み、みんなで楽しく交流できるまちを作ることが、私たち地域の代表である議員の役目であり、それこそが選ばれるまちづくりなのだと確信しました。ふるさと難民を出してはいけません。

1日目の最後に披露された長崎女子高等学校の生徒さんたちによる龍踊り(じゃおどり)が素晴らしかったです。

